
ハヤテのごとく！

血眼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！

【Nコード】

N1853J

【作者名】

血眼

【あらすじ】

借金執事、綾崎ハヤテに惚れてしまう美少女達、ハヤテは誰を選ぶのか？

第1話 朝

「僕の名前は、綾崎ハヤテです。親に1億5千万ほどの借金をかかえさせられていましたが、三千院家のお嬢様に肩代わりさせてもらい執事をしています」

「ハヤテ、誰に言っているんだ？」

「それは、これからこの小説よむひとのために紹介してるんですよ！ちなみに、こちらは、三千院家の（HIKIKOMORIの）お嬢様です。」

「HIKIKOMORIと聞こえたが…まあいい　ハヤテ！　朝ご飯食べに行くぞ」

「はい　お嬢様」

（食卓）

「ちゃっちゃと食べてくださいね」

「申し遅れました。私は、三千院家のメイドをしている、ピチピチの17歳マリアです」

本当に17歳なのかあ？

「17歳です!!!」

「マ、マリアさん？ 誰に言ってるんですか？」

「いえ、なんでもないです！ ちょっと作者に…」

ふっ あぶねえ

「ハヤテ！」

突然、ハヤテを呼び出すナギ

「なんでしょう お嬢様」

「明日から何があると思う？」

「そうですねえ… あっ 学校ですね！」

「そうだ！ だから私は休む」

「「お嬢様^{ナギ}」」

第2話 学校

「学校行きましょうよ！ お嬢様！」

「私は、行かんといったろ！」

「新学期なんですから、クラス替えとか見に行かないんですか？」

マリアがひっそりとナギに：

「（ハヤテ君と同じクラスになれないかもしれませんよ）」

「ハヤテ！ さっさと行くぞ」

「えっ？ でも お嬢様は行かないと」

「いいから 行くのだ！」

「は、はい！」

「では、マリアさん行ってきます」

「いってらっしゃい」

（学校）

「あっ ヒナギクさん おはようございます！」

「ハヤテ君、おはよう」

「ヒナギク 私のこと忘れてないか？」

「そ、そんな事ないわ ナギもおはよう」

絶対忘れてたな

「ヒナギクさんも一緒にクラス替え見に行きましょうよ」

「一緒になれるといいね」

ヒナギクの笑顔にハヤテは…

／／／

赤面してしまった

「デレデレするなあゝ!!！」

第3話 クラス表

〴〵クラス表〴〵

「ハヤテ！ 同じクラスだぞ」

「今年もよろしく願いします お嬢様！」

お得意の営業スマイルだあ〴〵

つい赤くしてしまうナギだった

「私もよろしくね ハヤテ君」

「ヒナギクさんも一緒なんですか？ 嬉しいですね」

「なにいつてるのよ ハヤテ君は〴〵〴〵〴〵」

こちらも、赤くしちゃったりしてなかったり

「〴〵私達も一緒なのだよハヤ太君」〴〵

「瀬川さん達も一緒なんですか！」

そりゃあそうだろ、作者の都合に合わせて書いてんだからな

「ということで、今年もよろしくな」

「どういふことなんですか？」

「気にしたら負けなのだよハヤ太君」

花菱、ハヤテ、朝風の順で言った

「それでは、皆さん教室に行きましょう！」

「ハヤテ、私は帰るぞ。SPがいるから大丈夫だ。じゃあな」

そそくさ帰ってしまったナギだった

「お嬢様〜!!」

ハヤテはいつまでも叫んでいた

第4話 放課後

（教室）

「担任は誰でしょうね？」

「大体察しがつくな」

ガラガラ

「このクラスの担任の桂 雪路よ」

「「やっぱりな」」

クラスのほとんどが落ち込んだとか

「なによ！ みんな 私がそんなにやだったの？」

「いえ、そういうわけでは…」

「罰金として、500円ずつ私にあげるのよ！」

金とんのかよ

「お姉ちゃん！」

「げっ いたの？」

「いたわよ！ 最初から」

ヒナギクによってボコボコにされたのは言うまでもなく

〽放課後〽

「さてと、僕も帰りますか」

「にはは〽 ハヤ太君!」

「瀬川さん、何ですか?」

「わかるでしょ♪」

「報告書ですね」

「うん♪」

しばらくして…

「書けましたよ 瀬川さん」

「ありがと ハヤ太君、大好き♪」

笑顔でハヤテに抱きつく泉だが、あの人達が見ていたとは…

「面白いものがみれたな」

「ああ、まさか泉がハヤ太君の事が好きだったとはな」

第5話 事故

「せ、瀬川さん 離れて下さい／＼／」

「ハヤ太君、真っ赤♪」

こんなやりとりをしていると…

パシヤ

「「アツいねえ」」

抱きついているところを撮られてしまった

「美希ちゃん、理沙ちゃん！」

「お、お二人さんいつから？」

「ハヤ太君、大好き♪」ってところかな？

「ほとんど最初からじゃないですか！」

若干キレ気味のハヤテだが

「まあ いいでしょ さっき撮った写真を返してくれたら、許しますよ」

「しょうがないな これは… ヒナにあげてくる！」

「そんな事されたら、僕は…僕は…」

今にも泣きそうなハヤテだが

「ハヤ太君、嘘泣き下手くそだな」

美希によって、見破られた

「仕方ありませんね　使いたくなかったんですけどね」

「ハヤテのごとく！」

こんな事で超必殺技使ってんじゃないやねえよ

その頃ヒナギクは、教室に向かっていた

「ハヤテ君いるかな？」

『ハヤテのごとく！』

「えっ？　これって、ハヤテ君の超必殺技よね？」

声の方に向かっていくと…

ドォーン

ハヤテは、ものすごいスピードで美希と理沙に…そしてヒナギクまで巻き込んでしまった

５分後

「す、すみません まだ制御出来ないのに使ってしまった」

「「ハヤテ（ハヤ太）君、どいてくれない／＼／＼／」

第6話 鈍感

「えっ？」

ハヤテは、美希、理沙、ヒナギクを押し倒している状態なのだから

「ご、ごめんなさい／＼／＼」

しばらく沈黙が流れた

「ハヤ太君、速いよ！」

遅れて泉もきたが、何も知らない泉は：

「みんな真っ赤♪」

さらに真っ赤にしてしまう4人だったとか

く帰り道く

これから、いろんな視点で書きます

ハヤテ視点

「僕は、なんてことをしてしまったんだ！」

「明日、皆さんに謝らないと…」

ヒナギク視点

「ハヤテ君に押し倒されちゃった／＼／」

「ハヤテ君に顔合わせれないよ」

泉視点

「どうしてみんな真っ赤だったんだろう？」

「明日ハヤ太君に聞いてみよ♪」

美希視点

「これが恋か／＼／」

理沙視点

「ハヤ太君もなかなかやるな。私を惚れさせるとはなただぶつかっただけ」

～次の日～

「お嬢様！ 学校に行きましょうよ」

また、いつものやりとりが始まったと思ったが…

「よし、行くぞ！」

「えっ？」

すんなり、学校へいくことを承知したナギに不思議に思ったハヤテだった。

〵学校〵

「はぁ〵」

「はぁ〵」

「どうした ハヤテ？ さっきから溜め息ばかりついて」

「昨日、お嬢様が帰った後いろいろあったんですよ」

「いってみろ」

「はい、放課後… 『言っちゃ だめ〵 !!!!!!!』」

「ヒ、ヒナギクさん！」

「ヒナギク どうした？」

「ちょっと ハヤテ君借りるわね！」

〽生徒会室〽

「ハヤテ君！ どういうつもり？」

「何がでしょう？」

「ナギに放課後の事言ったら、ハヤテ君クビになるわよ！」

「えっ どうしてですか？」

「（この鈍感さんは…）」

「とにかく 言っちゃだめだからね」

「は、はあ」

「そんなあいまいな返事しない！」

「はい！」

「あっ ヒナギクさん その… 昨日はごめんなさい」

「気にしないで 私も 嬉しかったし／＼／」

「?」

全く意味が分からないハヤテだった

第7話 勘違い

「そろそろ、お嬢様の所に戻っていいでしょうか？」

「ええ… 戻っていいわよ」

少し寂しそうなヒナギク

「では、ヒナギクさん （手伝いに）放課後に」

「えっ？ ／／／」

ハヤテがナギの所に戻った後、ヒナギクは…

「（ハヤテ君に告白されちゃう／／／）」

勘違いが激しいヒナギクであった

「お嬢様～」

「ハヤテ、遅いではないか！」

「すみません」

「で、さっきの話を話を話せ」

「はい、実は… 『ナギに放課後の事言ったら、ハヤテ君クビになるわよ！』」

ふと、ヒナギクが言ったことを思い出した

「いえ、もういいです」

「そうなのか？」

「じゃあ、さっさと行くぞ！」

「はい」

～放課後～

「ハヤテ、帰るぞ」

「すみません お嬢様、僕は用事があるので、先に帰って下さい」
必死に頼むハヤテに根負けし

「わかった、はやくかえってこいよ」

「わかりました」

～生徒会室～

「ハヤテ君、まだかしら／＼／？」

ガチャ

「失礼します」

「ハヤテ君／＼」

「何か手伝うことありますか？」

「へっ？」

「（…………私の勘違い？）」

今更気づいたのかよ

「ヒナギクさん？」

「はい！」

いきなり呼ばれたので敬語になってしまったヒナギク

「何かありますか？」

「何かって？」

人の話はきちんと聞こう！

「手伝うことですよ！」

「そうね、じゃあその書類やってくれる？」

「はい わかりました」

〽30分後〽

「終わりましたよ」

「ありがと、お茶でも飲む？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「いつもヒナギクさんの入れたお茶はおいしいですね」

「もう、なにいつてるのよ／＼／」

満更でもないようだ

「じゃあ 僕は、これで」

「ちょっと待って！ い、一緒に帰らない？」

「いいですよ」

心の中でガッツポーズをするヒナギク

第8話 好き？

「ねえ ハヤテ君」

「何ですか？ ヒナギクさん」

「私のこと好き？／／／」

いきなり、なにいつてんだ！

「（友達として）好きですよ」

鈍感野郎

／／／

勘違いしてんじゃねえよ

「（ハ、ハヤテ君、私の事好きって言うてくれた／／／）」

「ヒナギクさん 顔が赤いですけど、熱でもあるんですか？」

「だ、大丈夫よ／／」

「じゃあ、ハヤテ君また学校でね」

「はい、さようなら」

〽桂家〽

「♪」

ご機嫌ですな

「ヒナちゃん、何か良いことがあった？」

「ハヤテ君とは、何もなかったわよ！／＼／＼」

「へえ〽 ハヤテ君と♪」

「（は、はめられた）」

「もう、部屋にいくね！」

〽三千院家〽

「ただいま、帰りました」

「お帰りなさい、ハヤテ君」

「ハヤテ、遅い！」

「すみません」

「さっさと、相手しろ！ マリアが強すぎてかなわん」

マリアさん…こえゝ

「ちょっと、先にいっててください」

「わかった、なるべく早くこいよ」

「わかりました」

ナギがいなくなると

「マリアさん 『好き』 ってヒナギクさんに聞かれたんですけど…」
いきなりマリアさんに言うなよ

「（ヒナギクさん、大胆ですねゝ）」

「ハヤテ君は、何ていったんですか？」

「好きって言いました」

「えっ？ それは…どういう意味で言ったんですか？」
「友達として、好きっていう意味ですよ」

「（この子は…）」

第9話 赤い

「マリアさん」

「今度は何ですか？」

「マリアさんは、僕の事好きですか？」

お前もなにいつてんだよ

「好きですよ／＼／／／」

そう、マリアもハヤテの事が好きだった、お屋敷にずっといるので、異性との交流が少ないため、ハヤテを好きになってしまったのだよ

つか、ハヤテだからこそ好きになれたんだよ

「僕も、マリアさんの事が好きですよ／＼／」

ハヤテはマリアの事が好きなのか？

「（ハヤテ君、顔が赤いですわね 私も、人のこと言えませんが）

／／／」

「じゃ、じゃあお嬢様の相手してきます」

逃げたな

「私も、ご飯でも作りましょうか」

逃げたな

かくしてハヤテはナギと深夜までゲームをし、寝る前に勉強をし寝たのは2、3時間だけだったとか、しかしハヤテは：

「よく寝たあゝ」

寝てねえだろ

「さてと、朝ご飯の準備でもしますか」

「マリアさん おはようございます／＼」

「ハヤテ君、おはようございます／＼」

「（目が合わせれない）」

「お嬢様が起きる前に作りましょうか」

「そうですわね」

二人とも切り替えがはやいな

そしていよいよ、最終回 ハヤテ争奪戦、誰がハヤテを手に入れるのか？

「ちょっと まで〜!!」

「私がまだ、起きてないだろうが！」

起きてんじゃん

「と、とにかく 明日は、私の屋敷に集合だあ〜」

第10話 最終回 前編

「よし、みんなそろったな、今日はハヤテ争奪戦だ」

「「「おオー」」」

参加者

三千院ナギ

マリア

桂 ヒナギク

瀬川 泉

花菱 美希

朝風 理沙

以上 6名でハヤテ争奪戦を行います

「あのー 僕はどうすればいいのでしょ?」

「これから3試合やるからな ハヤテはそこにでも立ってろ!」

扱いひでえゝ

第1試合 料理対決

「私はもちろん、お粥だな」

前回は油と間違えて洗剤使ったナギがお粥なんか作れんのか？

「私は、リゾットでも作りますか」

マリアさんは何作っても美味しいからな

「私は、カレーを作ろう」

自分が好きなもん作ってどうする

「いいんちよさんは、オムライスを作るのだゝ♪」

「美希どうする？」

「理沙ここは協力しよう」

ゝ30分後ゝ

「ハヤテ、どれが一番旨いか味見してもらおうぞ」

「まずは、私からな」

「うっ」

「前は、洗剤を間違えて入れてしまったが、今度は大丈夫だぞ」

「「（ハヤテ君、大丈夫だったのかな？）」「」」

おそろおそろ、口に入れるハヤテ

パクッ

「…美味しい」

「「「えっ？」」「」」

ここにいる全員が驚いた

「ほらな、私は何でも出来るのだ！」

うそをつくなぁー！！

「じゃあ、ハヤテ君私のを食べて下さい」

今度は、何のためらいもなく食べるハヤテだった

「さすが、マリアさん　いつ食べても美味しいですね」

「ふふっ　ありがとうございます♪」

「今度は、私よ　ハヤテ君どうぞ」

「どう？」

心配そうに聞いてくるヒナギク、答えはもちろん

「はい、とっても美味しいですよ」

「本当？ありがとハヤテ君」

「にはは　次はいいんちよさんだよ♪」

「瀬川さんは、オムライスですか？」

みたらわかるだろうっ！

「では、いただきます」

「瀬川さん、料理上手なんですね」

「いいんちよさんの力を甘く見ちゃいけないよ♪」

「最後は、私たちだ！」

料理では、勝ち目がないため協力したのだ

「何を作ったんですか？」

「実はな、美味しそうに出来たから食べてしまった… すまん
ハヤテ君」

「そ、そうなんですか」

「じゃ、じゃあハヤテ どれが一番か言え！」

「そうですね…」

「マリアさんのリゾットです」

まあ、当然の結果だな

「ちっ さすがマリアだな」

「マリアさん、やるわね」

「それより、ハヤテ君どれが一番美味しくなかった？」

泉なにいつてんだよ

「その人には失礼ですが、お嬢様です」

当然だな

「ハヤテ！ お前は美味しいと言ったじゃないか」

「それは、お嬢様を傷つけたくなかったからです」

「お嬢様、調味料に何をいれましたか？」

「塩だ！」

お粥に塩を入れるのは当たり前だな

「味見をしましたか？」

「してないが」

普通はするよ

「お嬢様は塩ではなく砂糖をいれています…」

「「「えっ！」「」」

ここにいる、すべてのものがまた驚いた

第10話 最終回 中編

「砂糖だと…」

甘いやつですな

「はい」

「ハヤテ君、大丈夫なの？」

ヒナギクが心配そうに聞いてくる

「なんとか、大丈夫です…」

普通は大丈夫じゃねえよ

「ハヤテ、すまん」

「気にしないでください、これぐらい平気ですよ。いつもなら、もっとひどいですから」

笑顔でそんな事言うなよ

「さっ、続けましょ！」

「ああ、わかった」

ハヤテと関係ねえし

「うるさい！」

久しぶりに突っ込まれた

「じゃあ、生徒会お三方はハンデとして70点あげます」

「「「マリアさん、ありがとう」」」

70点とか満点とったら170点だし…まあ、絶対とれねえし

「「「楽勝♪」」」

ナギ、ヒナギク、マリアは言った

「「「わかんないよ」」」

3人組は言った

「テスト開始」

・・・

「テスト終了」

結果発表

一位	100点	マリア、泉
二位	98点	ナギ、ヒナギク
三位	80点	美希、理沙

「納得いかん！」

「マリアはともかく、委員長がなぜ一位なのだ！」

「しょうがないじゃないですか、ハンデがあったんですから」

ハヤテが言ったが…

「うるさい！」

ナギによってかき消された

「ナギ、諦めましょ」

ヒナギクが慰めるが…

「黙れ！」

また、かき消された

「納得いかんといったらいかんだ!」

わがままめ

「黙れ!」

本日2回目です…

「ナギ、こうしましょ。今までの試合は無効にして、ハヤテ君に決めてもらうってのはどうでしょう?」

「それだ!」

初めからそうしろよ

「お前が書いたんだぞ」

うっ　今のは効いたあ…

「じゃあ、ハヤテ私たちの中でどれがいいか、決めろ!!」

・
・
・
・

返事がない

「ハヤテ?」

「ヒナギクさん、聞きました？ うるさいって言われました…」

「かわいいそうね… 私も黙れって言われたわ…」

「かわいいそうですね… 僕、そんなに役にたたないですか？」

「そんな事ないわよ、ハヤテ君は役にたってるわよ」

「そうですか？」

「そうよ」

隅で、暗いトークをし続けるハヤテとヒナギク

「ハヤテ！」

「わかってますよ。 そうですね…」

運命の決断、ハヤテは誰を選ぶのか？

第10話 最終回 後編

「僕は、マリアさんが好きですよ」

「えっ!!」

「お前は、クリスマスのあの夜、私が好きって言ったのは嘘か？」

「ここは、私が話しましょう」

「マリア! どういうことだ!」

「実は、……………」

「ハヤテ、お前は、私を誘拐しようとしたのか？」

「はい、お嬢様」

「でも、なぜマリアなのだ」

「お嬢様はまだ、13歳ですし恋愛感情には入りません」

「私は身も心も大人だぞ!!」

「それでも、僕はマリ…」

「もういい! 出ていけ クビだ!」

「わかりました…」

〃お屋敷玄関前〃

「じゃあ、お嬢様…いや三千院さん、さようなら、お金の方はちゃんと返しますから」

「マリアさん、好きですけどもう会うことはないですね…」

「ヒナギクさん、ごめんなさい約束破ってしまって、学校の方はもうやめてしまうんで寂しいです」

「生徒会お三方、色々あったけど内心、楽しかったです、見かけたら声でもかけてくださいね」

ハヤテは、一人一人お別れをいった

「では、皆さん さようなら…」

ハヤテは、去ったどこまでも歩いていった

「これから、どうしますかね、バイトでもして稼ぎますか。 あれ？
瀬川さん」

「うえゝん」

「どうしたんですか？瀬川さん」

「ハ、ハヤテ君／＼／」

まあ、当然だろ さっきお別れしたんだから

「なんで泣いてるんですか？」

お前のせいだろうが

「ねえ、ハヤテ君はこれからどうするの？」

「いくあてもないから、バイトでもしようかなって」

「ねえ！ ハヤテ君 私の執事をやらない？」

第10話 最終回 後編（後書き）

ハヤテのごとく！を読んでくれて有難う。次回も、続くぞお！

次回

ハヤテのごとく！ 二章

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1853j/>

ハヤテのごとく！

2010年10月10日16時43分発行